

パキスタンを知ろう

毎週火曜日 全10回(1月11日～3月15日)
財団法人国際文化会館講堂

コーディネーターからのメッセージ

パキスタンはイスラーム諸国の中では、近代的要素を最も強く持つ国の一つです。国民の 97% がイスラーム教徒で、しかも年々イスラーム色が濃くなってきていますが、同時にこの国では近代的な官僚機構、軍隊が存在し、科学技術も発達しています。流暢な英語を話す人も数多くいます。

近年、特に 9.11 事件以降、イスラーム世界と西洋文明の「衝突」が指摘されるようになりました。果たしてイスラームと近代主義の調和は可能なのか。もし可能なら、どのような社会や政治形態、そして文化が生まれるのか。パキスタンはそういった疑問に答える最良の国かも知れません。また、それゆえに多くの苦悩を抱えている国でもあります。

本講座では、以上の問題を解き明かすために、パキスタンという国をさまざまな方面から見ていきます。「パキスタン文明」とはどのようなものか。どのようにして国家が誕生したのか。なぜインドとこうまで対立するのか。軍事政権時代が長かったのはどのような理由からか。現代のパキスタンの経済問題は何か。イスラーム教は国家や国民にとってどのような意味を持つのか。パキスタン固有の文化とはいかなるものか。そしてパキスタンの今後のゆくえは国際社会にどのような影響を与えるのか。それぞれの問題を専門家が解明していきます。 (広瀬 崇子)

第 1 回 1 月 11 日(火)

パキスタン国家の成り立ち 広瀬 崇子

1947 年パキスタンは、インドとともに、イギリス植民地支配から独立した。ヒンドゥーとムスリム(イスラーム教徒)は別の民族であるから、1 つの国で一緒に暮らせないという「2 民族論」に基づくものであった。当時ムスリム多住であった地域を領土として「ムスリム国家」が誕生したのである。新たに引かれた「国境」を越えて、ムスリムはインドからパキスタンへ、ヒンドゥー教徒やシク教徒は逆方向に、それぞれ移住した。その数は 1000 万人におよぶ。その際、宗派暴動などで 100 万人もの犠牲者を出した。

独立国家パキスタンは、インドと比べると悪条件でスタートした。分離独立の際にパキスタン側に配分された領土は後進地域が多く、政党や指導者も経験が浅かった。しかも建国の功労者の多くは、独立前はインドに住んでいた「移民」であった。ムスリム国家パキスタンがイスラーム教をどのように扱うべきかについても合意はなかった。多くの矛盾をかかえたまさに苦難の船出であった。

第 2 回 1 月 18 日(火)

「宿敵インド」の誕生 広瀬 崇子

パキスタンが「ムスリム国家」となったのに対し、インドは信仰の自由を認める政教分離国家を選択し、ムスリムも多数インドに残った。現在、パキスタンとほぼ同数のムスリムがインドに住んでいる。両国の建国の理念は真っ向から対立し、互いに相手の国家理念を否定することによって自らの正当性を証明できるという、宿命の対決が始まった。

「兄弟対決」の象徴的存在がカシミールである。ここはマハラジャが支配する藩王国であったが、分離独立に伴い印パいずれかの国に帰属せねばならなかった。しかし、マハラジャはヒンドゥーで、住民

の多くはムスリム、しかもムスリム住民もまとまっていた。ムスリム多住のカシミールがパキスタンに加盟しなければ、ムスリム国家パキスタンは完成しない。一方、宗教を理由にパキスタンに入るのであれば、インドの政教分離主義は危うくなる。いずれにとっても国の存亡にかかわる重要な地域なのである。独立以来両国は3度の戦争を戦い、現在に至るまで、核兵器を保有した南アジアの「兄弟国」は、カシミール問題の解決を見出していない。

第3回 1月25日(火)

文明発祥の地パキスタン インダス文明とガンダーラ文化 …………… 小西 正捷

パキスタンは新しい国であるが、幾多の古文化発祥の国でもある。首都イスラマバードからすらさほど遠くないソアン河畔からは数十万年前の旧石器が得られるし、やがてバローチストーン丘陵は、より西方からの古代農耕の波及を受けとめた。さらにインダス川流域でも文明への胎動が始まると、古代文明のうちでも唯一、大規模な計画都市を築きあげた「インダス文明」が展開する。この地は西アジアや中央アジアとも境を接し、他方南へは、この国の中央を貫くインダスの流れにそってインド洋アラビア海に至る。またその北東部は、肥沃なパンジャーブ平原を経てインド世界に連なる。このような地理的条件によって、この地はまさに次々と、他文明からも多大な影響を受けつつ、独自の文化・文明を築き上げてきたのである。

インダス文明にもそのような異文化接触のあとが見られるが、東西文明の接触による文化展開といえば、仏教文化として日本でもつとに関心が寄せられてきた、いわゆるガンダーラ文化であろう。この文化も、単に西方の「ヘレニズム文化」と東方の「仏教文化」が融合した結果、というよりは、その舞台となったパキスタン自体の地理と文化に注目しつつ理解するべきではないだろうか。イスラーム国ながらこのようにいくつもの重要な非イスラーム的古文明をかかえるパキスタンの、これらの文化に対する眼差しをも紹介したい。

第4回 2月1日(火)

インド・イスラーム文明の成立と衰退 ムガル帝国から英領インド帝国へ …… 小西 正捷

イスラームが南アジア世界に与えた影響は計りしれない。インド中央部のデリーに展開した「デリー・サルタナット」諸王朝、さらにはそれに続くムガル王朝の遺産にも多少幻惑されてか、南アジア世界のイスラーム化の開始は11世紀以降のアフガニスタン側からの陸路を通じての交渉とみなされがちであるが、つとにイスラーム勢力は、8世紀という早きに海路を通じてインダス川下流のシンド地方に入っていた。その後もイスラームは、民衆の民間信仰とも結びあいつつ深く南アジア社会に浸透し、政治経済や思想信仰、あるいは建築・絵画・音楽などのような芸術的側面のみならず、衣食住のような日常生活にまで、大きな影響を与えてきた。このようなイスラームの遺産は、ことにラーホールのようなムガル朝の大都市遺構に如実に見ることができ、一方ではまたそれらの遺産は、いかにこの文明がやがて西欧列強、ことにイギリスの植民地主義によって蚕食され、衰退を迎えざるを得なかったかを証言している。

しかし一方では、古来さまざまな異文化を受けとめ、吸収し、それらを自らのものとしてきたこの地では、やがてイギリス文化をすら吸収して、独自の「アングロ・インド」文化を確立していく。その態度は、かえって自ら「独自」の伝統へのかたくななまでのこだわりを見せたインド側とはやや異なっていた。その様相は、白衣裸足のガンディーと、りゅうとした背広姿のジンナーの対比にも、象徴的にみることができるかもしれない。

第5回 2月8日(火)

変遷するイスラーム：国家と宗教 …………… 井上 あえか

パキスタンはイスラームを国の宗教と定めるムスリムの国である。国民のイスラーム意識は、時には隣国インドとの敵対関係と結びついてあらわれる。しかしパキスタン対インドという文脈では一枚岩に見えるイスラームも、その政治的・社会的役割について国民的な合意があるわけではなく、時代によって、政権によって、大きく揺れ動いてきた。パキスタンにおけるイスラームが多様であることや、イスラームがナショナリズムに反映されることによって強調されてきたことが事態を複雑にし、近年においても、カシミールやアフガニスタンの問題が国内のムスリムのアイデンティティを強める作用をもたらしている。こうした現状を理解するために、パキスタンの代表的思想家が国家とイスラームの関係をいかに論じてきたか、そしてイスラームが歴代政権の政治過程とどのように関連してきたのか、再検証をこころみる。

第6回 2月15日(火)

国家と教育(公教育とマドラサ) …………… 山根 聡

国家における教育は、国民の基本的な人権の意識を育み、国家にとって有用な人材を確保するだけでなく、国家の将来を担う人材を育成する役割を持つ。パキスタンの識字率は45%(1998年)で、決して高い数値ではない。

特に農村部での女子就学率の低さや、中途退学率の高さなどが問題となっているが、その背景には、女子教育に対する関心の低さや、教員養成の問題、通学事情の問題、学校の設備や教育の質の問題などが挙げられる。これらの諸問題に対し、パキスタン政府は、義務教育の無償化や女子教育、高等教育の推進など、多様な教育政策を展開している。パキスタンの教育事業は、公教育と授業料の高い私立学校、そしてマドラサ(イスラーム学院)が担っているが、本講義では、パキスタンの教育の実態を識字率、就学率や退学率、マドラサの教育などの資料をもとに概観し、公教育の抱えるさまざまな課題やイスラーム教育のありようなどについて検討したい。

第7回 2月22日(火)

パキスタンの多様性：言語と民族 …………… 麻田 豊

日本の人口をすでにこえたパキスタンの言語と民族の構成・分布はかなり複雑である。全国民が日常生活レベルで共通に話している言語がひとつもなく、国語ウルドゥー語は全人口の8%弱の母語であるにすぎない、という特殊な状況に驚かされる。国語以外の有力な地域語は、民族問題とも密接に絡み合いながら、これまでずっと推進運動を展開してきている。ここでは、国語、公用語、教育手段言語、地域語(母語)、民族などのキーワードをめぐるパキスタンの多様な文化的側面に焦点をあててみたい。言語と言語、民族と民族の摩擦と共存の中に、また各言語の口承文芸の中に、人々の生き方と心のよりどころを探ってみたい。さらに、隣国のインドやアフガニスタンとは言語・民族的にどのような共通項をもっているのだろうか。南アジアと西アジアの狭間に位置するパキスタンが浮かび上がってくるであろう。

第8回 3月1日(火)

パキスタンの経済 黒崎 卓

パキスタンは、人口1億4000万人を数える大国です。1人当たり国民所得では500ドル弱、世界の低所得国に分類されますが、1947年の独立以降の経済成長率は平均で5%前後と堅実なものでした。にもかかわらず、国民の生活水準の伸びを示す重要な指標である1人当たり所得の成長率で見ると他のアジア諸国に見劣りしてしまう原因は、高い人口増加率です。高い人口増加率の背景には、教育や保健衛生など社会開発面での開発の遅れがあると言われていています。また、都市部と農村部とでの生活水準の格差も大きく、旅行者が都市部の高級ホテルで眼にする風景と、村での生活はまさに別世界です。言い換えれば、500ドル弱という平均所得の数字は、教育や衛生面などでの開発の遅れや男女間の格差などを考慮すると、パキスタン国民の生活水準を過大に評価しているとも見られるのかもしれませんが。

本講義では、このようなパキスタン経済の特徴を概観し、同国が有する高い発展の潜在性とそれを実現するために必要な政治改革、制度改革について考えます。

第9回 3月8日(火)

軍政は民政への過渡期か、民政が軍政への過渡期か 濱口 恒夫

1947年8月にインドとともにイギリス植民地支配から独立したパキスタンにおいては、その後4度クーデタで軍事政権が樹立された。1958-69年のアユーブ・カーン政権、1960-71年のヤヒヤー・カーン政権、1977-88年のジアー・ハック政権、1999年から現在に至るパルヴェーズ・ムシャッラフ政権である。これらの直接的軍政および間接的軍政(軍・民の権力分有体制)の期間は合計30年に達し、独立後57年の半分以上にも及ぶ。現行ムシャッラフ政権は2004年4月に、軍部の長年の念願であった国家安全保障会議法を制定して、国政介入の合法化・制度化を果たした。パキスタン政治において軍部・官僚支配がなぜこのように強固なのか、民主化の展望は拓けるのか、を考える。

第10回 3月15日(火)

世界の中のパキスタン 堀本 武功

パキスタンには、二つの地政学的な特色があり、その特色が世界におけるパキスタンの位置付けやその行動に大きな影響を及ぼしていると考えられる。

第1には、パキスタンが南アジア地域 山脈と海とに囲まれた閉鎖的地理環境 にあるに属している点。パキスタンは、この閉鎖的な空間で南アジアのナンバーツー的な位置にあり、ナンバーワンのインドとの対立を起こしやすい。

第2に、視野を南アジアから周囲に広げると、パキスタンが中東(と中央アジア)と東南アジアとに跨っていること。ムスリム国家であるパキスタンは、中東イスラーム圏の東端にあって、その一部を構成しているため、多かれ少なかれ、イスラーム諸国との関係からプラス・マイナスの影響を受けやすい。一方、パキスタンは、アジアの西端に位置していながら、東隣のインドに阻まれ、両地域に跨るという利点を十分に生かし切れない。

講義では、こうした地政学的な位置がパキスタンにとってどのような得失をもたらしたかを検証するとともに、今後の国際関係における位置付けや諸外国 米、中国、インド、日本 との関係などを展望してみたい。

講師紹介

広瀬 崇子（ひろせ たかこ）（講座コーディネーター） 専修大学法学部教授

津田塾大学卒業、ロンドン大学博士号(Ph. D., 国際関係論)。専攻は南アジア政治・国際関係。主な著書に、『パキスタンを知る 60 章』（共編 明石書店 2003 年）、『アフガニスタン・南西アジア情勢を読み解く』（共編 明石書店 2002 年）、『現代南アジア 3 民主主義へのとりくみ』（共編 東京大学出版会 2002 年）、『国際情勢ベーシック・シリーズ 東南・南アジア / オセアニア』（共著 自由国民社 2001 年）、『イスラーム諸国の民主化と民族問題』（未来社 1997 年）、Two Asian Democracies, (Konark, 1994) などがある。

小西 正捷（こにし まさとし） 立教大学名誉教授

1938 年生まれ。国際基督教大学・カルカッタ大学大学院・東京大学大学院に学ぶ。法政大学教授、立教大学教授を経てインド高等学術研究所研究員を歴任、インド世界の基層文化諸相を、考古学・文化史・人類学の分野から研究中。主著に、『人間の世界歴史 8 多様のインド世界』（三省堂 1981 年）、『インド民衆の文化誌』（法政大学出版局 1986 年）、『インド民俗芸能誌』（法政大学出版局 2002 年）、編著に、『もっと知りたいパキスタン』（弘文堂 1987 年）、『原インドの世界』（東京美術 1995 年）、『アジア読本・インド』（河出書房新社 1997 年）などがある。

井上 あえか（いのうえ あえか） 就実大学人文科学部総合歴史学科助教授

東京生まれ。1987 年東京外国語大学外国語学部インド・パーキスターン語学科卒業。1990 年同大学院地域研究科修士課程修了。1992 年 - 93 年インド・デリー大学留学。1996 - 98 年在パキスタン日本大使館専門調査員。1999 年東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得満期退学。東京大学非常勤講師などを経て 2004 年 4 月より現職。主要論文は、「パキスタン統合の原理としてのイスラーム」（黒崎卓・子島進・山根聡編『現代パキスタン分析』岩波書店 2004 年）、「カシミール分割されざる溪谷」（武内進一編『国家・暴力・政治 アジア・アフリカの紛争をめぐって』アジア経済研究所 2003 年）、「パキスタン政治におけるイスラーム」（『アジア研究』第 49 巻第 1 号 アジア政経学会 2003 年）、「パキスタンにおける民主政治の限界」（『アジ研ワールド・トレンド』2003 年 6 月号 アジア経済研究所）など。

山根 聡（やまね そう） 大阪外国語大学外国語学部地域文化学科助教授

1964 年生。大阪外国語大学インド・パキスタン語学科卒業、同大学院修了後、1991 年、パキスタン国パンジャーブ大学オリエンタルカレッジ・ウルドゥー文学修士課程修了。1994 年より 2 年間、在パキスタン日本国大使館勤務を経て現職。専門はウルドゥー文学、南アジアのイスラーム文化。主要な著書に『パキスタンを知るための 60 章』（共編著 明石書店 2003 年）、『現代パキスタン分析』（共編著 岩波書店 2004 年）、『現代イスラーム思想と政治運動』（共著 東京大学出版会 2003 年）など。

麻田 豊（あさだ ゆたか） 東京外国語大学外国語学部助教授

1948 年神奈川県生まれ。東京外国語大学大学院外国語学研究科(アジア第二言語専攻)修士課程修了。1974-76 年カラチ大学(パキスタン)留学。1976-78 年在カラチ日本国総領事館広報文化センター勤務。大阪外国語大学外国語学部助手、講師、東京外国語大学外国語学部講師を経て、現職。専攻はウルドゥー語学文学、インド・イスラーム文化。著訳書に『ウルドゥー語常用 6000 語』(共編 大学書林)、『ウルドゥー文学名作選』(訳注 大学書林)、『日本語ウルドゥー語小辞典』(共編 大学書林)、『もっと知りたいパキスタン』(共著 弘文堂)、『都市の顔・インドの旅』(共著 春秋社)、M.アンマン『四人の托鉢僧の物語』(補 平凡社)、F.バルト『スワート最後の支配者』(監修 勁草書房)、『インド・ネパール・スリランカの民話』(共訳 みくに出版)、N.A.チシュティー『パンジャーブ生活文化史』(監訳 平凡社)、『パキスタンを知るための 60 章』(共著 明石書店)などがある。

黒崎 卓（くろさき たかし） 一橋大学経済研究所助教授

1964 年栃木県生まれ。スタンフォード大学大学院博士課程修了(Ph.D.)。アジア経済研究所研究員を経て、1997 年より現職。専門は開発経済学、農業経済学、南アジア経済論。パキスタンのパンジャーブ州・北西辺境州での農村調査や、日本の対パキスタン ODA に関する調査研究等を行ってきた。主な著書は、Risk and Household Behavior in Pakistan's Agriculture (アジア経済研究所、1998 年)、『開発のミクロ経済学:理論と応用』(岩波書店 2001 年)、『開発経済学:貧困削減へのアプローチ』(共著 日本評論社 2003 年)、『現代パキスタン分析:民族・国民・国家』(共編著 岩波書店 2004 年)など。他にパキスタンの貧困問題や農村経済に関する論文多数。

濱口 恒夫（はまぐち つねお） 大阪外国語大学地域文化研究科教授

1939 年に高知県に生まれる。1962 年に大阪外国語大学インド語学科卒業後、特殊法人アジア経済研究所職員を経て、1967 年以来約 40 年間大阪外国語大学にて教育・研究に携わる。専門は南アジア現代史・政治経済論。主著に、『南アジア現代史 - パキスタン・バングラデシュ』(共著 山川出版社 1977 年)、『インド経済 - 発展と再編』(共編著 世界思想社 1986 年)、『移民から市民へ - 世界のインド系コミュニティ』(共編著 東京大学出版会 2000 年)がある。

堀本 武功（ほりもと たけのり） 尚美学園大学総合政策学部教授

中央大学法学部卒・デリー大学政治学修士。国立国会図書館調査及び立法考査局長を経て、現在、尚美学園大学総合政策学部 / 大学院教授。専攻は、アメリカの地域政策(アジア)・南アジア国際関係。今、もっとも関心を持っているテーマは、今後の日本外交。著書に、『インド現代政治史』(刀水書房 1997 年)、『現代アメリカ入門』(編著 明石書店 2004 年)、『アメリカはなぜインドに注目するのか:台頭する大国インド』(訳書 明石書店 2003 年)。共編著に、『アフガニスタン・南西アジア情勢を読み解く』(明石書店 2003 年)、『叢書現代南アジア第 3 巻 南アジアの政治』(東大出版会 2003 年)がある。